

JSA 事務局 ニュース

日本科学者会議

57期第3号 2021年8月10日発行

事務局 〒113-0034

文京区湯島1-9-15

茶州ビル9F

コロナ禍ですが、いろいろ工夫して会員拡大を!

<http://www.jsa.gr.jp> 電話 03-3812-1472 Fax 3813-2363 mail@jsa.gr.jp

益川敏英さん（日本科学者会議代表幹事）のご逝去を悼み、追悼の意をささげます

井原 聡（東京支部）・松田 正久（愛知支部）

7月23日、益川さんがお亡くなりになった。益川さんは、2016年度から今日に至るまで、本会議の代表幹事を長きにわたって引き受けていただいていた、日本の「知」を代表する方であった。

益川さんは、Progress of Theoretical Physics（第49巻第2号（1973年2月）652～657ページ、理論物理学刊行会）掲載の小林誠さんとの論文「CP-Violation in the Renormalizable Theory of Weak Interaction」で、CP対称性を破るために、基本粒子（クォーク）の6元模型を提唱した。当時は3種の基本粒子に加え、1971年に4個目の基本粒子の存在が丹生潔さんらの実験で指摘された（「写真乾板で発見した新素粒子の飛跡——歴史的回顧」『日本の科学者』2009.1）。これを受けて1972年、1973年に小川修三さんらは「4つめの粒子」（第4クォーク）であると主張したが広く認められるには至らなかった（なお、1974年アメリカの線形加速器を使った研究チームがこれを「発見」し、1976年ノーベル賞を受賞している）が、益川さんと小林さんは4つ目が存在することをもとに、6個の基本粒子の存在の必然性を指摘された。その後1977年に第5のクォークが発見されると、1979年「基本粒子の模型に関する研究」でお二人は仁科記念賞を受賞している。1984年にはCERNで第6のクォークが報告されると日本学士院は「まだ確認の段階に至っていないが…物理学において確実な前進への最も重要な里程碑として役割は高く評価しなければならない」として学士院賞をお二人に授与している。第6のクォーク（トップクォーク）が発見されたのは1994年で、益川・小林理論が正しいことが証明され、益川さんと小林さんは2008年度のノーベル物理学賞を南部陽一郎博士とともに受賞された。

益川さんは、学士院賞受賞の前年『日本の科学者』に9頁におよぶ素粒子分野の見事な解説文「<科学の新展開>現代の物質観——素粒子はどこまでわかったか」（1984.10）を書いている。目下、進行中の自らが主人公にもかかわらず、そのことには一言も触れず素粒子論史的一幕を語り切っている。

2面へ続く

◇「益川敏英さんのご冥福を心よりお祈りいたします」を、JSA ウェブサイトの見解・声明等のページに掲載いたしました。 <https://jsa.gr.jp/03statement/index.htm>（事務局）

目次 代表幹事就任挨拶 5 合同連続講座「大震災復興の10年を考える」8/23開始、原水爆禁止科学者集会 6-7 『日本の科学者』、学術体制 8-9 会員拡大・組織強化 10-12

★コロナ対応で「事務局ニュース」はメール配信のみとしています。支部内での普及にご協力ください。

その後、様々な書を通して、社会に対しメッセージを発信し続けてきた。そして私たちはそれらを通して、益川さんの思いがどのように形成されてきたかを知ることができる。益川さんは、1970年に名古屋大学から京都大学に移られるが、松田が4年生の時、5～6人の同級生とともに、ゼミの面倒を見ていただいた。その後、同じ分野（素粒子論）の研究者として益川さんを知ることになるが、松田にとっては畏敬の念を抱くすごい研究者であった。

益川さん自身が、子供のころから研究者として育つ過程を鈴木恒雄さん、九後太一さんとの対談「2008年度ノーベル物理学賞受賞者益川敏英さんを囲んで——子ども時代から現在までを語る」（『日本の科学者』2009.5）で詳しく述べられているので、それをお読みいただきたい。その中での益川さんの心に残るいくつかの発言を紹介しておきたい。「日本の学術と教育の問題」に触れて、「絶対的窮乏化と教育システムの問題がある。学問の自然の発展の中で、自分の適性に合った学問を見つけられるという教育システムが必要で、教員の方に責任があると思います。だから、ポストを少々増やしただけでは、解決はしません」と言い、「大学入試制度の改善」では、「比較的しっかりした組織、日本科学者会議だけでよいとは思わないけれど、こうした組織がプロジェクトとして3～5年くらいのしっかりした計画のもとで「あり方」運動を展開しあるべき姿を示す「まとめ」を出すなど、一連のシステムがあってそこに各自の回答(宿題)を流し込んでいくというようなことをしないと…。運動は、主体があって、刈り取るシステムがないとだめ」と指摘し、「基礎科学の振興」については「山は、すそ野と頂上があって成り立つ。頂上は、すそ野があるから成り立っているんです。トップダウンではなく、ボトムアップで実践を積み重ねていかなければ解決になりません。」として、最後に、「科学者の社会的責任」について、「科学者は、興味本位に研究するだけでなく、得られた成果が世界でどのような技術として使われるかということにも、責任を持つ必要がある。だから、科学者の責務として、また一市民として、反核・反戦平和運動¹⁾には参加しなければ、と思いつづけてきた」とまとめられている。この対談後10数年がたった今も、今に通用する珠玉の対談である。若い方々にも是非一読し、益川さんの思いを引き継いでほしいと願う。

小林さん、益川さんのノーベル賞受賞を記念して2010年に創られた「名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構」の機構長として、名古屋に来られるようになって、松田が研究室にお邪魔するようになったのが、東日本大震災後の2011年の暮れあたりだと思う。佐賀大学の近藤弘樹さん（故人）のお声掛けで、坂田昌一先生の「科学者は、科学者として学問を愛する以前に、まず、人間として、人類を愛さねばならない²⁾」に共鳴して月一回「坂田研究会」と称し、スカイプも併用し10数人の物理屋が集まるようになった。益川研究室の入ってすぐの薄板の横に坂田先生の筆になるこの文が貼ってあった。それだけ、益川さんは、このことを肝に銘じて、生きてこられたのだと思う。益川さんがこの会に出席されたのは2019年の9月が最後であった。益川さんは、自らの戦時体験を心に刻むことで、信念として「戦争はいかなる理由があろうと絶対してはいけなく、そうした動きがあれば、身を賭してでも戦わねばならない、200年後に人類は、必ず戦争のない社会に到達している」と語られた。私たちは、その遺志を受け継いでいかねばと、強く思う。

さて、益川さんは、日本科学者会議京都支部の会員であったので、詳しくは存じ上げないが、おそらく日本科学者会議発足（1965年）以来の会員であったと思う。

意外と忘れられているが、日本科学者会議研究基金準備委員会に、1991年設置された研究助成金審査委員会の初代委員長を務められたのは益川さんである。さらに日本学術会議が

2004年に自民党政府によって行政改革の対象として改革を迫られた時、益川さんは有識者として、総合科学技術会議の「日本学術会議の在り方に関する専門調査会」の専門委員を務められ、民営化や法人化が渦巻く中で、学術会議に設けられた180もの分野別研究連絡委員会(研連)のボトムアップの活動を強調しつつけるとともに、次のような見解を述べている。「学術会議の答申等が国の機関であるが故に、民間の団体が勝手なことを言っているのではない、国の機関として存在している学術会議がしかじかの答申、勧告をした、そこに重みがあると聞かされて、そう私は理解している。そういうことは私は重要だと思う。ただ単に私的な学協会の勝手なことをほざいているのではない。それだけ出てきた勧告等に対して1年ならば1年のうちに当時の総理府が対応しなければいけないというデューティーを負っていたはず。私はそういう関係が重要と思う。」(第12回議事録)

益川さんには、2016年5月から日本科学者会議の代表幹事を引き受けていただき、2017年度の「入会のすすめ」には「若者へ。今、日本は岐路にある！」と題した文章を寄せていただいた。益川さんは、2005年の「九条科学者の会」発足に際しては、呼びかけ人となり、「まがりなりにも日本が平和でこられたのも九条のおかげです。今九条の解釈のなしくずしで、1万キロメートルかなたまで日本の自衛隊が行っています。これ以上の事をするにはどうしても九条がじゃまです。平和の日本か戦争の日本か最後の攻防の瀬戸際まできています。我々はこの戦いに勝たねばなりません。³⁾」とメッセージを寄せられた。その姿勢はノーベル賞受賞後も変わることなく、2015年結成の「安全保障関連法に反対する学者の会(学者の会)」や愛知では「自由・平和・民主主義を愛し戦争法制に反対する名古屋大学人の会(名大アゴラ)」の呼びかけ人の一人として、1987年母校である名古屋大学の「平和憲章」を高く評価され、2016年5月には「戦争と学問について語る」と題した講演もされていたし、「あいち九条の会」や「憲法九条京都の会」の代表世話人も引き受けられていた。また、2017年6月に東京で開催されたJSA主催の「学術と学術体制のあり方を問う総合シンポジウム」で香山リカさんと対談されたのが、直接JSAの会議に出席された最後の集会となった⁴⁾。「安保法制違憲訴訟全国ネットワーク」の一つである「安保法制違憲訴訟あいち」の原告の一人として、裁判で証言するための陳述書も用意されていたが、体調不良のため、その思いを伝えられなかったことは残念でならない。

体調がよくない中、2020年の学術会議会員任命拒否問題では、10月の学者の会会見に「菅首相がこんな乱暴なことをしたということは歴史上長く糾弾されるだろう。戦争の反省の上に作られた日本学術会議に汚点を残すものだ⁵⁾」と批判するメッセージを寄せ、同じくJSA第23回総合学術研究集会(2020年12月)での緊急集会にも同趣旨のメッセージを寄せられ、この8月1日開催の原水爆禁止2021世界大会科学者集会のために2度まで病床の中から寄付をいただいた。

平和への強い思いをあらゆる場面で伝えてこられた益川敏英さんがお亡くなりになられたことは、反核・平和の運動にとって大きな痛手であり、もっともっと永く、益川さんの思いをたくさんの人々に伝えてほしかったという願いは、叶わなくなったが、日本科学者会議に集う我々研究者は、科学者の社会的責任を改めて自覚し、「科学を人類に役立て正しく発展させていくことは、わたしたち科学に携わる者の共通の任務(日本科学者会議会則前文)」として、益川さんの遺志を引き継いでいくことが、益川さんに対する最大のお悔やみとなると思う。益川さん、安らかにお眠りください。本当にありがとうございました。

益川敏英氏の『日本の科学者』掲載論文及び関連論文一覧

掲載論文等

- Vol.19 No.10 (通巻 201 号) 1984.10 <科学の新展開>現代の物質観——素粒子はどこまでわかったか 益川敏英
- Vol.27 No.5 (通巻 292 号) 1992.5 <対談>大学改革と現代科学の課題 益川敏英・大西広
- Vol.27 No.8 (通巻 295 号) 1992.8 <談話室>自然科学と弁証法 益川敏英
- Vol.42 No.1 (通巻 468 号) 2007.1 <扉のことば>科学の源流 益川敏英
- Vol.44 No.5 (通巻 496 号) 2009.5
<特別企画座談会> 2008 年度ノーベル物理学賞受賞者 益川敏英さんを囲んで——子ども時代から現在までを語る 益川敏英・九後太一・鈴木恒雄

関連論文

- Vol.44 No.1 (通巻 492 号) 2009.1 <特別レビュー：南部陽一郎・小林誠・益川敏英の3氏のノーベル物理学賞受賞記念>
写真乾板で発見した新素粒子の飛跡——歴史的回顧 丹生潔
<特別ひろば>小林・益川理論とは？ 坂東昌子
- Vol.44 No.6 (通巻 497 号) 2009.6 <扉のことば>南部・小林・益川3氏のノーベル物理学賞受賞に寄せて 小林昭三
<特別企画特集>南部陽一郎・小林誠・益川敏英・下村脩4氏の2008年度ノーベル賞受賞記念 その1
まえがき 生井兵治
- Vol.44 No.6 (通巻 497 号) 2009.6 <特別企画特集>南部陽一郎・小林誠・益川敏英・下村脩4氏の2008年度ノーベル賞受賞記念 その2
まえがき 生井兵治
2008年ノーベル物理学賞『破れた対称性』——日本の素粒子物理学 沢田昭二
- 2010年11月号 Vol.45 No.11 通巻514号 裏表紙見返し『日本の科学者』編集委員会編『益川敏英と科学の仲間』『憲法と現実政治』の紹介
- 2011年1月号 Vol.46 No.1 通巻516号 <レビュー>坂田昌一と研究室憲章——「小林・益川理論」誕生の源流 西谷正
『益川敏英と科学の仲間』を読んで 川井利長
- 2017年8月号『日本の科学者』Vol.52, No.8 通巻595号 巻頭言「平和と科学者の責任」

本文註

- 1) <http://www.jsa.gr.jp/JSAflyer201705.pdf>
- 2) 『科学と平和の創造』137ページ(坂田昌一著、岩波書店1963年)
- 3) 呼びかけ人メッセージ <http://www.9-jo-kagaku.jp/event/message.html>
- 4) この対談はYouTubeで聴ける：20170625 UPLAN 学術と学術体制のあり方を問うシンポ 学術研究の軍事利用を拒否する——平和・自由・自主・民主的であってこそ学術の発展がある <https://www.youtube.com/watch?v=XYwm2Jyw-ro> またこのシンポを収めた『学問の自由と研究者のモラルー「軍学共同」問題から考える』(本の泉社、2019年)が出版されている。
- 5) 学術会議任命拒否 安保関連法反対の学者が抗議声明 益川氏「長く糾弾されるだろう」——毎日新聞(mainichi.jp)を参照されたい。 <https://mainichi.jp/articles/20201014/k00/00m/010/178000c>

★ JSA では『日本の科学者』の過去の全論文のPDF ファイルを収録したDVD-Rを頒布しています。近年の巻は出版社が電子出版しています。入手ご希望の方は、全国事務局(表紙参照)におたずねください。